

---

# 仮面舞踏会 マスカレード

中里肴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面舞踏会 マスカレード

### 【Nコード】

N2928Z

### 【作者名】

中里肴

### 【あらすじ】

幻のVRMMORPG『仮面舞踏会』。世界初のVRMMORPGが突然の発売中止を宣言してから数年が経過した。現在は年に何本ものVRMMORPGが発売され次第に忘れ去られていきつつあった、ある6月の日の事。俺は、彼と出会った。

執筆修行に書き始めた作品ですので誤字脱字、その他諸々あるかとは思いますがどうかご容赦を。

## プロローグ

「仮面舞踏会　ねえ…。」

ある昼下がりの教室。6月にしては珍しい快晴の今日、昼食のおにぎりを1人寂しく頬張りながらネットサーフィンをしていた俺はたまたま見つけた掲示板のスレッドに目を留めた。

それは幻のVRMMORPG『仮面舞踏会』に関するものだった。

(まだ信じてるヤツがいたなんてな…。)

お茶で口の中のそれを胃に流し込んで一息吐くと時計を確認する。まだ次の授業まで時間がある事を確認すると仮想モニターに再び目を落とす。

(うわあ…『俺は仮面舞踏会のプレイヤーだ』とか)

今更そんな言葉を信じる馬鹿はいないだろうに。何だか憐れな気さえしてきた。

仮面舞踏会は世界初のVRMMORPGとしてその名を知らない者はいない程で、ゲームには全くと言っていいほど無関心だった我が家の父でさえもテレビでMEが取り上げられている時は新聞から僅かに顔を上げて聞いていた。

日本中の誰もが待ち望んだそれはしかし、発売間近に迫ったある日、発売中止となった。

その後の苦情の山とマスコミの関係者に対する執着心たるや、想

像を絶するものだったとかなんとか、詳しい事はよく知らない。ただ、俺もかなりショックを受けたのはハッキリと記憶している。

つまり、店頭さえ並ぶ事の無かったゲームなのだ。それをプレイしているというのはおかしな話だ。

そもそも、凍結したはずの運営はどこ誰が行うというのだ？それだけで嘘だと分かるだろうに。

(まあ、やってみたって気持ちは解るけどな。)

そこで授業開始を告げるチャイムの音が鳴り響いた。と同時に外部ネットワークとの通信が遮断される。

スレッドの代わりに仮想モニター上で再生を始めた数学の授業用プログラムの映像を一瞥すると左隅にある10倍速のアイコンを押して窓の外の景色へと意識を向けた。

(かったるいな、ホント。)

今日の授業内容分は昨日予習をしておいたので既に頭の中に入っている。

両親の世代は教師が直接授業を行っていたらしいが、定期考査の作成と文化祭や体育祭などの行事の準備が主な仕事となった現在では授業中に居眠りをしようがボーツとしていようが結果さえ残せば何も言ったりはしない。

プログラムが終了したのを確認すると1週間前にインストールした電子書籍を開く。十年以上も昔に出版された外国のファンタジー小説なのだが、これが中々面白い。暇潰しにもってこいの大ボリュームであるのもグッドだ。

物語も佳境に差し掛かった所でふと射るような強い視線を感じて

何気無く顔を上げると、そこには嫌悪感剥き出しの雫幼馴染みの顔があった。

「なにやってんのよ、アンタ。」

右手で頬杖をつき、左手の人差し指でコンコン、と机を叩く。

「読書だよ、見りゃ分かるだろ。」

「まだ授業中なんですけどお？」

壁に掛かっている時計を示す。メンドクサイ奴だな…。

「他の奴らにも言えよ、」

「今はアンタの話してんだけど。」

(いちいち突っ掛かるなよ、ホント)

「あゝ分かった分かった、やめれば良いんだろ、やめれば。」

ヒラヒラと手を振ると槩を挟み込んでから閉じる。

「今だけやめれば良いってもんじゃないでしょ!？」

従ってやったというのにまだ噛みついてくるかコイツは。

「ちよっ、待ちなさいよ!! ねえ 匠!!!」

「… ったく、中学じゃ話しかけても無視してたくせに…何だよア

「イツ。」

放課後、1人帰路に就いた俺は自宅とは逆の方へと向かう。まあ、寄り道ってやつだ。

（確か数日前に新作のゲームが発売されていたはず。 ）

駅前のゲームショップまでの道程を脳内再生し曲がり角に差し掛かった所で不意に人影が

「痛ッ!!」

減速する事無く突っ込んで来た初老の男性はかなり深刻な表情をしていた。

「す、すまない少年。しかし急いでいるのだ、赦してくれ!!」

地面に倒れた俺の腕を掴むと強い力で引っ張り上げると顔を隠すようにグレーの帽子の鰐を下げて、次の曲がり角へと走り去った。

「大変そうだな　ん？」

地面にいかにも高そうな金のチップケースが転がっていた。恐らく先程の男性の物だろう。俺はそれを拾い上げる男性の後を追った。

「いた!!」

前方20メートル、人混みのせいで思うように進めないのか人と人の間を縫って進む彼の姿を見付けた。

「チップケース落とししましたよ〜ッ!!」

(だめだ、喧騒に掻き消されてる。)

あるいは自分の事だと気付いていないのかもしれない。

やむを得ず前を歩く人々を強引に押し退けて行く。舌打ちやら文句やらを浴びながら進み続ける。

「ちょっと、どこ見て歩いてんのよ!!」「危ねーなッ!!」

「御免なさい御免なさい!!」

ようやく彼の背中が見えた時には酷い有り様だった。走ってもいないのに息が切れ、セットされていたはずの髪はボサボサ。行き交う人々がチラチラと盗み見ては口許を押さえて笑いを堪えている。

「これ、落とし物、ですよ。」

息を整えながらチップケースを差し出すと、僅かに驚いたような表情を見せる。

「これをわざわざ届けに?」

「え?そう…:…ですけど。」

「これの中身は?」

「見てないですけど…:…?」

余程大事なモノ?まさか、かなりヤバいモノだったり…:…?

「成る程、成る程…。」

ケースと俺を交互に見遣る。全てを見透かすような視線に思わずたじろいだ。そして、

「ありがとう。しかしこれはもう私には必要の無い物なんだ。」

手の中でポンポンと軽くお手玉して柔らかな、それでいてどこか切なげな笑みを浮かべる。

「だから、君にあげよう。」

ピン、と親指に弾かれたチップケースが弧を描いて俺の掌に収まった。

「え、あの、え？」

唐突過ぎる申し出に戸惑う俺に『使うかどうかは君次第だがね。』とだけ言い残して去ってしまった。

「あの…。」

完全に置いてきぼりを食らった俺をまるで嘲笑うかの如く、チップケースがキラリと光った。

「ただいま。」

時刻は午後7時半。真つ暗な家の中で点滅する電話機が目に入った。留守電、恐らく父親からだろう。

メッセージは予想通り父からで、今夜は遅くなるから夕飯は要らないとの事だった。

(今夜はカップ麺で済ませるか…。)

ポットの中のお湯の量を確認すると殆ど残っていなかった。

水を沸騰させてる間にベランダに干されたままの洗濯物を取り込む。日が落ちて大分経ったせいで冷たくなっていた。寒さに身震いしつつ、手早くそれらを抱え込んで室内へと帰還する。

冷えた身体を包むように二の腕を擦りつつテレビの電源を点けると、気象予報士が向こう1週間の天気を告げていた。

「明日6月7日の天気は

」

洗濯物を畳みながら適当に聞き流していると、不意に街で会った男性の言葉を思い出した。

『使つかどうかは君次第だがね。』

ゴソゴソと制服のポケットからチップケースを取り出す。

かなり小型のチップ、これに対応する端末はアレ以外は有り得ないだろう。

《ドリーム》

世界初のVR機器において、他には。

「使うかどうかは君次第、」

ケースを開き、チップを取り出す。1?×1?の極小サイズのそれを目を凝らすように注意深く観察したが、そこにはたった1字大きく刻まれた“M”の文字があるだけだった。恐らくはこのゲームの名前の頭文字イニシャルなのだろう。

（ “M” まさか、マリ…いやいや、ナイナイ。）

頭に浮かんだ考えをかぶりをふって否定する。赤帽に青いオーバーオールオーバールの配管工になれてもあまり嬉しく無い。

（とにかく、だ。実際に確かめれば良いんだ、うん。）

そう結論付けると、バラエティ番組の始まったテレビの電源を落として自室へと向かう。

簡素な部屋の数少ない家具 本棚とクローゼットの隙間にひっそりと息を潜めていたそれはバイクのヘルメットのような形状をしている。ホコリが積もっている様子はお伽噺の『かさこ地蔵』を思わせる。

「最近めっきり使って無かったからな…。」

フツと息を強く吹きかけてホコリを粗方飛ばすと残りをガムテープでくつつける。あまり使っていないので傷一つ無く、まるで新品のようだ。

「本当は第2世代チヨーク型が良かったんだけどな…。」

フルフェイスの第1世代は見た目の野暮ったさ以前に機能面にも

欠陥がある。と言っても動作停止やバグの類いでは無い。

長時間連続プレイし続けると首が痛くなるのだ。どうやらドリ<sup>V</sup>ー<sup>R</sup>ムの重量に問題があるらしく、説明書にも大きな赤文字で記載されていたはずだ。

「とりあえず設定だけ整えるか。」

明日は金曜日、学校が終わってからいくらでもプレイする時間はある。

チップを差し込み口に挿入、やや重量感のあるヘルメットですっぽり顔を覆うと手探りでスイッチを入れる。

スイッチがスライドする確かな手応えを感じる間もなく意識が遮断された。

目覚めると俺は仰向けになっていた。ノロノロと上体を起こして辺りを見渡すが、何も無い。人つ子1人、いや、石ころ1つ草1本さえどこにも見当たらない。ただ平らに開けた土地が何処までも続いているのみだ。殺風景とはまさにこの事だろう。

薄暗く地上を照らす太陽の光は現実のそれとは比べるべくも無い程に弱々しい。いつそ月光だと言われた方が納得するだろう。

『夢の世界へようこそ。』

「ッ!」

声があった方へと振り向くと、“彼”がいた。ただし頭上にある

のはグレーの帽子では無く、黒のシルクハットだ。

「貴方は、いや、それ以前にどうやって…!?!?」

「ああ、“コレ”はダウンロードさえ完了すればチップもVR機も必要としないからね。」

「…?」

ゲームのハードであるVR機も要らない　って、それじゃあゲームは何処に…?

混乱する俺の顔を実に愉快そうに見ていた彼は、やがて口を開いた。

「つまり、ダウンロード先は僕らの頭の中という事だよ。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2928z/>

---

仮面舞踏会 マスカレード

2011年12月10日12時54分発行